

「一握の砂」と『立身策』と『美の宗教』

河野 有時

明治四十年、函館でのことかと思われる。「盛岡中学校校友会雑誌」へ「一握の砂」を書く啄木の手もとには、一冊の『立身策』があったのではないか。まず、それを確認してみたい。左の上は「一握の砂」、下が『立身策』である。

噫、「怠る勿れ」かく謂ひて戒むる人も、かく謂ひて戒めらるゝ人も、多くは皆忘りてあるこそ浅ましけれ。こゝに大方の人のために、忘るべからざるサルヴァンテス<sup>1</sup>が言あり。曰く時と称する大時計には、唯一語の記されあるのみ曰く「今。」又曰く、人はいづれ追々といふ途を過ぎて、遂には決して能はずといふ家に至るもの也。

古詩にも亦同じ意味なるがあり。曰く、無窮其者といへども、一分時の損失を回復するの力あることなし。

閃々と前に落ち後に去る「今」こそは、まことにこれ「永遠」の瞳なるべき也。「今」を捉へよ。然らずば「永遠」は汝の手より逃げ去らむ。前頭に髪あれども後頭なめらかに禿げて、一度のがせば追へどもく捉へ難き「機会」は、即ち此「今」也。砂翁の句に曰く予は時を浪費せり、今や時予を浪費せむとす、と。

時と稱する大時計には唯一語の記されあるのみ、曰く今。人は孰れ追々と云ふ途を過ぎて、遂に決して能はずと云ふ家に至るもの也。

サルヴァンテス

〔『立身策』第八章 現在に働け〕八八頁

無窮其物と雖、一分時の損失を回復するの力ある事なし 古詩  
予は時を浪費せり、今や時予を浪費せんとす。

シエークスピア

〔『立身策』第四章 貴重なる分秒時〕六一頁

啄木が「一握の砂」に引いた「サルヴァンテスが言」「古詩」「砂翁の句」は、『立身策』に掲げられていたそれだったに違いない。『立身策』には「羅馬の古諺に曰く『機會は其前頭毛髪を有すれども、後頭は禿也。』」の記述もあるが、この「羅馬の古諺」と同様に、金言、古詩の類いであれば、他所でいくらでも目にするのがあったのではないかとの見方もあるかもしれない。その吟味は後述するとして、まずは、『立身策』とは何かということから話を始めてみよう。

一

『立身策』は明治三十年十月に開拓社から刊行された。隅谷巳三郎<sup>(3)</sup>による纂訳で、原書は、オリソン・スウェット・マーデン (Orison Swett Marden) の *Pushing to the front; or, Success under difficulties: a book of inspiration and encouragement to all who are struggling for self-elevation along the paths of knowledge and of duty* である。その「緒言」に隅谷は、原書は *Pushing to the Front or, Success Under Difficulties* と云ひ、Orison Swett Marden 氏の著す所にして、數年の勞を積みしもの、其目的は逆境の青年に光明を與へ、立身の大道を示し、進取勇往の必要を教ふるにあり、而して之又此纂譯の成る所以なりとす。

と記してゐる。  
一八四六年にニューハンプシャー州で生まれたマーデンは、今日では雑誌 SUCCESS を創刊した人物として知られているかもしれない

い。三歳で母親を、七歳で父親を亡くし、幼い頃からマーデンの苦勞は絶えなかったようだ。そんなある日、マーデンに人生の転機が訪れる。屋根裏部屋で、たまたまサミュエル・スマイルズの *Self-Help* を手にしたのだ。その本をダイヤモンドのように重く感じたマーデンは覚えてしまうほど何度も読み返したと述べている。そして、*Self-Help* が自分やイギリスの少年たちの刺激となったように、アメリカの少年たちを励ます本をいつか書きたいと夢見たのだそう。その後、マーデンはボストン大学を卒業し、ハーバード大学では医学博士号を取得しただけでなく、ホテル経営にも乗り出して成功を取めたのである。ところが、事業の拡大に失敗し、ホテルも火事で失うことになってしまった。そればかりか、この火災によってマーデンは書きためていたアメリカ版 *Self-Help* の五千頁にもわたる原稿まで灰にしてしまったのである。けれども、マーデンは諦めなかった。ボストンに戻り、夢の本を書き直して、一八九四年、ついに *Pushing to the Front* が世に出た。<sup>(4)</sup>

この *Pushing to the Front* は、すぐに世界中で広く読まれることになるのだが、日本も例外ではなかった。マーガレット・コノリーによる *The life story of Orison Swett Marden* <sup>(5)</sup> には、

Nearly one million copies have been sold in Japan alone. "I have 'Pushing to the Front' issued by four houses there," says Arthur W. Brown. "I also had it from three others, but gave them away. — and think I have seen it from three more, but am not quite sure, — all with notes in Japanese, and, I think, no two just alike. A Japanese whom I knew in the old Embassy days under Lanman called on me

in Providence, and told of its great vogue in his country. I expressed surprise. 'Why,' said he, 'among ourselves we often call it the Japanese Bible.' At this I expressed still greater surprise. 'Didn't you know,' he asked, 'that it was that book which gave us the courage to resist the Russian encroachments?'"

と書かれている。「日本だけで百万部近く売れている」という記述がどの程度事実を伝えているかは不明ながら、『立身策』だけでなく、『出世の葉』（明三四・三、博文館）、『立身訓』（明三五・七、明進堂）、『成人哲学』（明三六・九、弘文社）というように、姿を変えて複数の出版社から発行されていたところからすると、まったくの根拠のない話というわけでもなさそうだ。

「坊っちゃん」には、「誰を捕まへても片仮名の唐人の名を並べたがる」赤シャツの悪癖に、坊っちゃんが、おれの様な数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがい、云ふならフランクリンの自伝だとかプツシング、ツ、ゼ、フロントだとか、おれでも知つてる名を使ふがい、。

と腹を立てる場面があるが、「プツシング、ツ、ゼ、フロント」はそれくらいなら「おれでも知つてる」というほどに名前が売れていたのである。The life story of Orison Sweet Marden には、この本が「ロシアの侵略に抵抗する勇気を与えた」という発言が紹介されているが、その当否はともかく、マーデンよろしく Self Help (『西国立志編』) に影響を受けた世代に続く日露戦前の青年たちが Pushing to the Front の主な読者層になっていたと言ふことはできるだろう。

Pushing to the Front は、明治四十二年から四十三年にかけて『立志論』として全五巻で内外出版協会から竹村修訳で刊行されるなど、日露戦後も長く読み続けられていったようだ。ただ、これには別の理由があつた。英語の教科書や教材として使用されていたのである。明治三十年に三省堂からこれが発売されると、三年後の『プツシングツ、ゼ、フロント註解』（英語世界社）の「序」に「此書ノ大ニ用ヒラレテ都鄙官公私諸種ノ學校ニ於テ教科書トナルニ至ラントハ」と驚きをもつて語られたが、明治四十二年六月の『譯註プツシングツ、ゼ、フロント』（日進堂）の「はしがき」には「現今我中等程度の學校にして、本書を採用せざるもの殆んど之無き」と、「序」には「余の嘗つて中學に學ぶ際に教科書として用ゐ、後自ら中學に教鞭を執る際にも之を用ゐし事あり」と述べられるまでになつている。これは、マーデンの「区切れなく続く特徴をもち、そこではしばしば省略がなされ、意味不明瞭な表現がちりばめられて」という「独特の英文」が、教える側には却つて都合がよかったからかもしれない。だが、学校という制度によつて、立身と英語が攪拌され、容易に混ざり合つたであろうことも想像に難くない。だから、『盛岡中学校校友會雜誌』に「一握の砂」を書く啄木が、Pushing to the Front を意識したとしても、それ自体は不自然なことではないだろう。とは言え、これほど多くの関連書籍がひしめく中で啄木が参照したのは、『立身策』その本だったのだろうか。冒頭に引いた箇所から、さらに一節を抜き出し、検証してみよう。

こゝに大方の人のために、忘るべからざるサルヴァンテスがあり。曰く時と称する大時計には、唯一語の記されあるのみ。曰く「今」又曰く、人はいづれ追々といふ途を過ぎて、遂には決して能はずといふ家に至るもの也。

この箇所は、次のような『立身策』の「第八章 現在に働け」の冒頭部分から抜き出したものと推測される。

時と稱する大時計には唯一語の記されあるのみ、曰く今。  
人は孰れ追々と云ふ途を過ぎて、遂に決して能はず、云ふ家に至るもの也。

サルヴァンテス

何時其を始むべきやと考ふるや、時既に遅き事屢々之れあり

クウインチリアン

愚者が心を決したる時は、競賣既に終れる時也。西班牙古諺  
躊躇して其日を失はば、明日も亦失はる可し、然して明後日に  
至ては尚更に怠惰ならん。

直行して此瞬時を捕へよ。 シエークスピア

*Pushing to the Front* <sup>(8)</sup>では多くの章の冒頭でエピグラフのように、  
俚諺や金言が配されており、『立身策』はそれを受けているのだが、  
原書でこの箇所は下のようになっていた。

“On the great clock of time there is but one word — NOW.”

Note the sublime precision that leads the earth over a circuit of five hundred millions of miles back to the solstice at the appointed moment without the loss of one second, — no, not the millionth part of a second, — for ages and ages of which it traveled that imperiled road. — EDWARD EVERETT.

“Who cannot but see oftentimes how strange the threads of our destiny run? Oft it is only for a moment the favorable instant is presented. We miss it, and months and years are lost.”

By the street of by and by one arrives at the house of never. — CERVANTES.

Whilst we are considering when we are to begin, it is often too late to act. — QUINTILIAN.

When a fool has made up his mind the market has gone by. — SPANISH PROVERB.

It is no use running; to set out betimes is the main point. — LA FONTAINE.

“Lose this day by loitering — ‘I will be the same story to-morrow, and the next more dilatory.”

Let's take the instant by the forward top. — SHAKESPEARE.

一見して分かるように、『立身策』はすべてを訳出してはいない。  
たとえは“Note the sublime precision that leads the earth over a circuit

of five hundred millions of miles back to the solstice at the appointed moment without the loss of one second. — no, not the millionth part of a second. — for ages and ages of which it traveled that imperiled road.」というアメリカの政治家エドワード・エヴァレットの言葉は省かれてゐる。続く、「Who cannot but see oftentimes how strange the threads of our destiny run? Oft it is only for a moment the favorable instant is presented. We miss it, and months and years are lost.」も見当たらないが、それ以上に(こゝで注目すべき点)は、これにも冒頭の、

“On the great clock of time there is but one word — now.”

にも、「」が付されているということだろう。この「」は、これらが特定の人物の言ではなく、俚諺の類いだということを示しているのだと思われる。つまり、「On the great clock of time there is but one word — now.」は、掲げられた順からも明らかなように、『ドン・キホーテ』で知られたセルバンテスの言葉として紹介されてはいないのだ。『立身策』は、

時と稱する大時計には唯一語の記されあるのみ、曰く今。

に「」を付けるか、行を開けるなどして続く「サルヴァンテス」の言葉と区別できるようにすべきだったのかもしれない。だが、そうしなかったために、「時と稱する大時計には唯一語の記されあるのみ、曰く今。」と「人は孰れ追々と云ふ途を過ぎて、遂に決して能はずと云ふ家に至るもの也。」は、ともに「サルヴァンテス」の言葉に見えてしまうことになった。「一握の砂」が、

こゝに大方の人のために、忘るべからざるサルヴァンテスが言あり。曰く時と稱する大時計には、唯一語の記されあるのみ曰

く。「今」又曰く、人はいづれ追々と云ふ途を過ぎて、遂には決して能はずといふ家に至るもの也。

として、この両方を「サルヴァンテスが言」として紹介したのは、『立身策』に由来したためだと思われる。啄木の手もとに一冊の『立身策』があったと考へるのであるが、啄木が引き写したのはこの箇所ではなかった。このあとの部分、

ガリリオ、地球回転説を唱導して当時の教法に触れ、捕へられて獄裡の人となるや、一本の麦藁よりして、空洞なる鉄棒は却つて立体鉄棒よりも堅固なる事を悟りき。

は、『立身策』第三章 卑賤と立志」四十八頁の、

ガリ、ヲは強いて其父母よりして、醫學を學ばしめられたるも、其餘暇を以て天文を窮め、地球回転説を立て、當時の教法に觸れて獄に投ぜらるゝや、一本の麥藁よりして、空洞なる鐵棒は却て立体鉄棒よりも堅固なる事を悟りき、

によつてゐるのではないか。さらに、「一握の砂」を最初から確認していくと、以下のような箇所も散見される。

ヂスレリーの言ひけらく、青年にして上を仰がずして下を見、其精神の發揚せざるものは、これ地上に匍匐すべきもの也。

(「一握の砂」第一段)

デキスレリーは曰く青年にして上を眺めずして、下を見、其精神發暢せざるものは、地上に匍匐すべきもの也と、

〔立身策〕「第二十四章 功名心」二二六四頁)

昔は賢女コルネリオ、一婦人の爲に其所持の宝玉を見んことを望まるるや、己が愛児を指して、彼等こそ妾が第一の宝玉なれと答へき。

〔一握の砂〕第三段)

コル子リヲは、一婦人の爲に其持てる寶石を示さん事を請はるゝや、今しも校舎より歸り來れる小兒を指して、彼等こそ我寶石なれと答へたり、

〔立身策〕「第十四章 最大の事業」一五三頁)

共和政治の定義を知らずして世界を治め能ふ者あり。地球の円形なるを知らずして、地球の大部を支配したる者あり。これトマス、ブラウンが言へる所以て吾人が座右の銘とするに足る。

〔一握の砂〕第九段)

トーマス、ブラウンの曰く、共和政治の定義を知らずして世界を治め能ふ者あり、地球の圓形なるを知らずして、地球の大部を支配したる者ありと、

〔立身策〕「第十二章 常識實際的能力」一三四頁)

つまり、たまたま目に入ったというようなことではなく、「一握の砂」の構想には最初から『立身策』を織り込むことが企図されていたと見るべきなのである。では、この「一握の砂」という語も『立身策』の中にあつたのだろうか。

### 三

結論から言えば、『立身策』の中に「一握の砂」という語は見当たらない。左の「第十二章 常識實際的能力」の一節が関連しているように見えなくはないという程度である。

ウヰリアム征服大王が英國を征服せんとして英國に上陸するや、誤て地上に倒れたるに、彼は直ちに土砂を握み叫んで曰はく、予は英國の土地を得たりと、以て士卒が大將戦地に倒るとの凶兆に打たる、を變じて吉兆とはなしき、之れ彼の機智なりし也、

ここは、原文では、

When Caesar stumbled in landing on the beach of Britain, he

instantly grasped a handful of sand and held it aloft as a signal of triumph, hiding forever from his followers the ill omen of his threatened fall.

となつてゐる。さうから「a handful of sand」と書かれていても、当の『立身策』では「土砂を握み」と訳されており、「一握の砂」と併置するのはあまりに恣意的に過ぎるとの批判を受けそうだ。ただ、同じ箇所を、『立身訓』（明三五・七、明進堂）では、

シーザー始めて英國に上陸するや、誤りて踏み倒れたり、彼は起きながら一握の砂を取りて、高く三軍に示して曰く、之れ此地を得るの前兆なりと、軍隊爲めに勇氣を鼓したりき

とされており、「a handful of sand」は「一握の砂」となつてゐる。これに過度の比重をかければ、失意のまま故郷を離れ、「予は新運命を北海の岸に開拓せんとす」とした啄木が、「逆境の青年に光明を與へ」という『立身策』の中から、英國に上陸するやいなやその「土砂」を握り吉兆とした王になぞらえて、盛岡中学校の学生たちの「勇氣を鼓した」ことになる。しかしながら、かかる理解はもちろん誤りであろう。「一握の砂」はさまざま素材を用いて書かれているが、それらの核となる、たとえて言えばそれらをより合わせるための縦糸が『立身策』というわけではないからだ。そのことを巴里美術館の肖像が教えてくれるのだが、今度は『立身策』の方から見てみよう。

『立身策』の「第十一章 熱誠」（一二二頁）には、次のような逸話が紹介されている。

巴里美術館に行ける者は、必ずや一個の貧寒なる美術家の手になりし肖像を見たるならん、彼美術家は其家貧しかりしかば常に物置二階に於て業を勵みたりき、彼が丹精を凝らして作りたる土塊の肖像既に成りたるの時、偶降霜嚴しふして之を破らんとするの恐ありき、是に於て彼は其着たる衣を脱ぎて此土塊を掩ひ、漸くにして其を守り得たりと雖、身は翌朝凍死してありぬ、彼大理石の肖像は即ち此土塊の模型に由れるもの也、彼が身は死したりと雖、熱誠の情は今尙此肖像に印せられて後之を見るものをして慘然として彼が不幸を悲しむと共に又大に熱誠の勢力を悟らしむ。

これを下絵として描かれたのが、次の「一握の砂」の第六段である。

いとも貧しき一美術家ありき。常に物置二階にありて、孜孜として其業を励みぬ。壁破れ、柱歪み、一燈蠅々として影淡き処、髪は乱れて蓬の如く、面容憔悴して骨徒らに高く、目のみぞ火の如く燃えたり。彼はかくの如くして、寝を忘れ食を忘れ、日夜營々として其鑊を動かせるなりき。一夜、夜漸やく更けて四隣闐たるの時、彼は静かに鑊を捨てて立てり。其目はたとしへなき悦びに輝やき、其頬は仄かに紅を潮して、いひがたき満足の微笑を湛へたり。見よ、彼が前に立てる神工生けるが如き一肖像を。神ならでげにかくも真に迫れるものを作りうべしとは思はれざる程なり。彼は今しも之を作り了へたる也。其

心の欲び何ものにかは若かむ。仄かなる燈火の影さへに、此時一きは明くなれるやうなりき。然も此肖像は、唯一個の土偶に過ぎざる也。貧しき彼は大理石の一塊をだに購ふ事能はざりき。既にして彼は歩を移して破れたる窓を開けり。時は恰も秋。万点の星斗燦として九臯に花を散らし、寥々たる鋼色の夜天は厳かに大地を圧して、何かは知らぬ大いなる秘密の前に、いひ知らず心の躍るもけだかし。大気はいと冷やかに窓より流れ入りて、消えみ明るみする燈火あやふくも減えなんぞ。烈しき霜は来らむとすと眩やきて、彼は窓を閉ぢ、再び土偶の前に来りつ。作り了へたるのみなれば烈しき霜夜の寒さ或は之を破りなむ。されども貧しき彼は、此室内を温むべき一本の薪をも有せざる也。是に於て、彼は其着たる襤褸を脱して此肖像を掩ひぬ。かくて漸やくにして其を守り得たりしも、夜明けて後、人其室に入りしに、彼は恰も忠実なる奴隸の如く其作れる肖像の下に打臥して、閉ぢたる目は再び開かず、幽かなる微笑を残して凍死してありき。

噫友よ、美を求めてやまざる清浄なる勇氣は、つねにかくの如き也。これ豈此世に於ける最も貴きものならざらむや。彼は死せり。然れども之れ却つて永遠に生くるの道なりき。美は永遠の悦楽也、美を求めてやまざる心ある人は、乃ち又其生命を永遠と共にする人なるべき也。彼は凍死したりき。然れども其肖像は、美しき大理石にかたどられて今猶巴里美術館中にありといふ。

『立身策』から引用されたこれまでの箇所比して、この巴里美術館の肖像について「一握の砂」は実に念入りに語っている。それは、逸話の言わんとするところを置き換えるためだったろう。『立身策』でこの話は「第十一章 熱誠」に採られている。原題は、*THE TRIUMPHS OF ENTHUSIASM*。だつた。第十一章は、その章頭に「人一度熱誠の情に驅らるる、千艱萬難何の破るに難しとする所ある、熱誠は成業の活火と云ふべき也。」と前置きして、最初の例として「巴里美術館に行ける者は」と語り出している。『立身策』では残された肖像が見るものに「熱誠の勢力を悟らしむ」ことを訴えていたのである。

ところが、「一握の砂」では、この逸話への評価は「美を求めてやまざる清浄なる勇氣は、つねにかくの如き」と改められた。「貧しき一美術家」に対する饒舌な語り口も、貧しさを強調するためのものではなく、美術家の鬼気迫る様相を浮かび上がらせるもので、それらは「神ならでげにかくも真に迫れるものを作りうべし」へと連なっていく。さらに、『立身策』で降霜は「偶」のこととされていたが、「一握の砂」では、「一美術家」が窓を開けたことに端を発している。それにより、彼が「何かは知らぬ大いなる秘密の前に、いひ知らず心の躍る」場面が挿し込まれたのである。つまり、「一握の砂」は、熱意や情熱をもって取り組むことの大切さを告げる話となつたという話に変じたのである。この改変は、「一握の砂」が核としようしたところをよく物語っているように思われる。それを最終第十段の言葉を借りて言えば、「真と美と生命」ということに

なるのだろう。「一握の砂」は、『立身策』を織り込み、「立身の大道を示し、進取勇往の必要を教ふる」という色調を滲ませながらも、それとまったく異なるものをその縦糸としていたのである。これを啄木の功名なやり口と賞することもできるが、もう少し倍率を緩めて捉え直すことも可能かもしれない。

#### 四

次に示すのは、「一握の砂」が「盛岡中学校校友会雑誌」に掲載されてから三ヶ月後の明治四十年十二月の「英詩研究法」という記事で、野口米次郎によるものだ。

ウイリアム、ブレイキの詩に、

To see a world in a grain of sand,

A heaven in a wild flower;

Hold infinity in the palm of your hand,

And Eternity in a hour;

と云ふ句があるが、實に一粒の砂にも此の全世界を見ること。出来、汝の掌中にも無限を握り、只一時の間も猶且つ永遠無窮を現はすものである、眞理は決して遠きにあらざ近く足下にあるものであるが、兎角人は態々遠きに求めんとはするのである、又美の理想と雖も決して東西の區別はありはしない、日本人の美とする處は又英人も美とし、英人の美と觀する處又日本人も美と觀するのである。

引用されている英詩は、よく知られる「無垢の予兆」であるが、そ

れに続けて書かれた記述は、「一握の砂」の、

閃々と前に落ち後に去る「今」こそは、まことにこれ「永遠」の瞳なるべき也。「今」を捉へよ。然らずば「永遠」は汝の手より逃げ去らむ。

を想起させよう。「英詩研究法」の「眞理は決して遠きにあらざ近く足下にある」と、「一握の砂」の「爾の立つ所を深く掘れよかし」からは、両者に直接的な影響関係があるかのようにさえ見えるかもしれない。だが、「一握の砂」が「哲人の訓也」としているように、これらとともにニーチェの言葉に由来しているのであり、「一握の砂」のそれは、高山樗牛の「己れの立てるところ」<sup>[1]</sup>、

哲人教へて曰く、己れの立てるところを深く掘れ、其處には必ず泉あらむ。自らの心の中に求むるところあれよ、世は即ち汝のものならむ。

を背景としていたと考えるべきであろう。

しかし、ここでまず注目しておきたいのは、この野口米次郎の「英詩研究法」が雑誌「成功」に掲載されていたということなのだ。明治三十五年の十月に村上俊蔵によって「成功」は創刊された。その誌名から分かるように「成功」はマーデンの SUCCESS に倣ったものである。一九〇四年八月の SUCCESS には 'Our Little Broter in Japan' という記事が掲載されており How "Success" Inspired an Energetic Young Japanese Journalist to Start a Magazine along Similar Lines として、その経緯が紹介されている。それによれば、松島剛を主幹とする「学窓余談」という雑誌にかかわっていた村上は、松島宅の机上にあった SUCCESS を読んで感銘を受け、その目的と

精神を同じくする雑誌を日本でも創刊したいと考えたのだという。「成功」が表紙に「立志獨立進歩之友」と掲げているのもそれ故である。だから、野口米次郎の「英詩研究法」も、読み進めていけば、話題が「英詩を作らんと欲する者」の具体的な勉強法へと話題が移っていくのは当然のことだった。それを「英詩人」として成功した人物の経験談をもつてするのは、まさに「成功」雑誌に特有のやり方とすることができよう。そこに野口はニーチェの言葉や「無垢の子兆」を嵌め込んだのだが、「無垢の子兆」に示された「只一時の間も猶且つ永遠無窮を現はすものである」という認識は「成功」という雑誌の中の時間とは齟齬をきたすものだったのでないか。明治四十年九月の「成功」に村上は「青年處世者心得」を載せているが、そのなかの「今日只今の注意」には、「現在とは何ぞや、今日只今の事なり、一生とは何ぞや、今日只今を積累したるもの、謂に外ならず」と説かれているからだ。

啄木が「古詩」「砂翁の句」の句を引いた『立身策』の「第四章 貴重なる分秒時」には、  
永久と云ひ、無窮と云ふも、畢竟現在の一秒時。一秒時の堆積せるもののみ。

と書かれているが、「一握の砂」の「閃々と前に落ち後に去る『今』こそは、まことにこれ『永遠』の瞳なるべき也」という言は、「一秒時」の積み重なりが「一生」はおろか「永久」「無窮」にも通じるといふ主張と本来的に合致するものではない。ところが、「一握の砂」も「怠る勿れ」といふ文脈の中に、これを織り交せている。一秒時の積み重ねが永久に至ると考えるにせよ、今に永遠を看取で

きると考えるにせよ、一秒時や今が特別であるという認識には変わりはないため、継ぎ目を意識させずに接合できたのだろうが、それは予期せぬ混線ではなかつたはずだ。

岩波茂雄は、「明治三十六年の夏、私は信濃の国の北奥野尻湖上、人の住まぬ孤島に唯一人閑寂な生活を楽しんだことがある」と語りだし、

その頃は憂国の志士を以て任ずる書生が「乃公出でずんば蒼生をいかんせん」といつたような、慷慨悲憤の時代の後をうけて人生とは何ぞや、我は何処より来りて何処へ行く、というようなことを問題とする内観的煩悶時代でもあった。立身出世、功名富貴が如き言葉は男子として口にすることを恥じ、永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭わずという時代であつた。

と往時を回顧している。「身をたて名をあげ」という明快な立身出世の時代は過ぎ去り、学生たちは「内観的煩悶」を抱え込みながら過ごしていたというのだ。さらに四年後の「盛岡中学校校友会雑誌」第十号で「一握の砂」の直前に配されたのは「余の青年観」といふ記事であつたが、「眠れるものは起きよ、酔ひたるものは醒めよ」と飛ばされた檄には、青年たちの一層の気質の変化が浮き彫りになっているように感じられる。とはいえ、相手が「永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭わず」という学生であつても、校友会雑誌や「成功」はその性質上、奮起を促さないわけにはいかない。色調の濃淡は想定される読者層によって異なってくるのだろうが、結果として織り上げられたものの色合いが単一に

なることはなかったのだと思われる。そのため「一握の砂」の中の時間感覚は複層的になっていたのである。

## 五

「今」こそは、まことにこれ『永遠』の瞳」とした「一握の砂」が、巴里美術館の肖像をもつて「美を求めてやまざる心ある人は、乃ち又其生命を永遠と共にする人なるべき也」と主張したことのあるいは、岩波茂雄が言った「永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭わずという時代」の背景に、当代の青年たちを駆り立てた高山樗牛と姉崎嘲風の論考があることは間違いないところだろう。「一握の砂」は、「年若き旅人よ」と語り起こされるが、これも樗牛の「年若き人よ」<sup>16</sup>や、「古き眞理」冒頭の「年若き人よ、如何なれば是の麗はしき春の日を尚も名利の巷に走り暮さむとはするぞ」<sup>17</sup>を模したものに違いない。

啄木が、高山樗牛と姉崎嘲風から大きな影響を与えられ、「永遠の生命」という觀念に導かれたことについては、既に戸塚隆子によって精緻な考証が行われている。<sup>18</sup>「永遠の生命」という言葉だけでなく、高山樗牛及び姉崎嘲風から「受け継いだ精神は詩集『あこがれ』の世界に深く流れ込み、確かな思想基盤を形成している」と看破した戸塚の、「啄木が高山樗牛、姉崎嘲風から影響を受けた『永遠の生命』の思想は(いのち)の意味を大きく転換させながら詩から短歌へ形を変え、啄木の生涯を地下水脈のように流れている」という指摘には諸わざるを得ない。戸塚が引いた「清見濁の

除夜」や「戦へ、大に戦へ」に書かれた「今」も、確かに「一握の砂」のそれと響き合う。一方で、「貧しき一美術家」が「生命を永遠と共にする人」とされたとき、その前段に「美を求めてやまざる清浄なる勇氣」「美は永遠の悦楽」「美を求めてやまざる心ある人」と繰り返されていることに着目して補足するなら、明治四十年五月に博文館から発行された姉崎嘲風編『美の宗教』もまた「一握の砂」と関連する論述と見做すべきであると思われる。

『美の宗教』は、姉崎が「曾て夏休みにデ子マルクに行つた歸り、スコットランドに渡つて、リイスで一夜を明かした」ときに偶然泊まり合わせ知己となつた「E. P. B. 君」からの書簡を集めた「美の宗教」と「美の宗教から見た佛教」及び「外篇」からなつている。「歳月の多くは病床に横臥して病魔と闘つてをる身で、而かも美の神の信仰に安立し、平和と和樂とに加へて、光明ある永遠の希望を抱いて捷まない友の心をこめた筆の跡を、我が同胞に紹介するのは自分にとつて何よりも喜ばしい事」だと「序言」に書いた姉崎は、その人を樗牛と重ね合わせて「第二の友」と呼び、この友と自分の「思想は全躰に於て全く傾向を同じうし、理想を共にしてをり、此の書簡は自分の先に著はした『復活の曙光』の趣意を尙一層明白に布衍したものといつて差支ない」と評したのである。姉崎の手を握つて「自分は全く美の崇拜者である、自分の信ずる神は美の源泉で、又美を實にする神である」と語つたその友は、「細胞から星界に至るまで」の「宇宙」を「神といふ藝術家が案出し又作り出した藝術の作品」であると捉え、人間はこの宏大な宇宙の「大生命」の一部であつて、「大生命の一切統一」が「永遠である限り、

吾々も亦不滅である」と書き送っている。だから、「身體の生命は死ねば亡くなる様に見えるが、その實吾々の生命は一微塵も之が爲めに亡ばされない」と言うのだ。そして、いま我が身は病の床にあるが、

時計の砂が一粒づゝ滴るに従て、自分は此の光に一段々近づくの考へて、眼前に神を見る様に思ふ。

とも述べたのである。「E. P. B. 君」の弁舌は多岐に及ぶのだが、数々の書簡の中でも看過できないのは「二十、信仰の勝利」として掲げられた次のような箇所であろう。そこには、「我々の個人の身軀があつて生命があるのでなく、生命の活きた流が遍流して、その泡沫が身軀と結ばれてをるのである。泡沫はなくする事が出来るとしても、又如何に之を厭離する事が出来ても、その根である生命の流れは決して絶えない。この絶えない不滅の生命の中に、無限の進歩があり、理想の力があつて、希望と喜びとで我々を導いてをる」と前置きされ、続けて「或る詩人がいつた」として、左の詩が引かれている。

有情の命、終りに近しと嘆くや、君。

死は生に移る一時の中有のみ。

汝が胎内にありし間は死に同じからざりしや、

天地の寂靜にも似て、感じも呼吸もなくて。

さなり、汝は死なん。されど此の宏大の力、

汝の生命を造りし力は永へに活きん。

此の力は又無数の星を進行して變らぬ力、

此の力は又濱の砂子にその生命を與ふる力。

靜かにして喜べ、汝の眞の同胞は、

火にも嵐にも、又露の玉を湛はず花にもあり。

汝が不滅の生を悦び樂め、

無限の世界の心はこの生と一つぞ。

詩は「君」に死が訪れたとしても、その生命を造つた力は絶えることがなく、あらゆる生死の営みは不滅であつて、「君」の生と死もその中であつて永遠であるということを呈示しているように思われる。ここで注目すべきは、言うまでもなく、第二連最終行、

此の力は又濱の砂子にその生命を與ふる力。

である。「君」の「命」がそうであるなら、同じく「宏大の力」から「生命」を与えられた「砂子」もまた同様の存在であり、永遠の生命の流れのなかにあると言つていいだろう。そうであれば、「一握の砂」とは、掴み取られた不滅の生命と見ることができよう。「盛岡中学校校友會雜誌」に掲載された「一握の砂」は、『立身策』を取り込み、怠らず「今」を大切にすることに触れながらも、「美」を貴び、その「今」に「永遠」を掴むことを述べているように思われる。

ところが、周知のように、掌中の砂はいつまでもそこに握られてはいなかった。「一握の砂」では、

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

と歌われ、「いのちなき」ものとなつて手のうちからこぼれ落ちて  
いったのである。往時のことは、忘れ得ぬ出来事として、

頬につたふ

なみだのごはず

一握の砂を示しし人を忘れず

と歌われたものの、不滅の生の流れを手放さずにいることはできな  
かつたのだ。歌集における「一握の砂」について、たとえば今井泰  
子は「二首目と八首目が暗示している」として、「時々刻々流れて  
いく時の中で、むなしく消えていく現在の不幸な自分の生命、そう  
したささやかな生命への愛着と哀惜<sup>19)</sup>」を読み取つたが、それには  
「かつては永遠のものとして掴み取られ、示されたが」と前置され  
るべきだったように思われる。

いま目の前でさらさらとこぼれ落ちる砂とともに過ぎてゆく「今」  
に「われ」はもう永遠を見ることはないのだろう。もとより、立身  
出世のために「今」を積み上げていくこともないはずだ。だが、人  
は特別な「今」だけを生きているわけではないという自覚が「わ  
れ」にはあるのではないか。指の間から落ちていく砂には、忙しい  
生活の中で流れ過ぎようとする「今」への思いが込められているに  
違いない。それを歌という器で掬い取るときの、「いのちなき砂の  
かなしさよ」という呼びかけは、始発点としての「一握の砂」への  
呼びかけでもあっただろう。

〔付記〕石川啄木の作品及び日記、書簡等の引用は『石川啄木全  
集』（昭五三・一〜昭五五・三、筑摩書房）によつた。引用に際して  
ルビは省略した。ただし、「一握の砂」については、初出本文を参  
照して訂した。

〔注〕

(一) 「一握の砂」〔盛岡中学校校友会雑誌〕第一〇号、明四〇・九

「一握の砂」については、今井泰子『石川啄木論』

(一九七四・四、塙書房)、碓田のぼる『啄木の歌 その生  
と死』(昭五六・四、洋々社)、遊座昭吾『石川啄木の世界』

(一九八七・三、八重岳書房)、近藤典彦『「一握の砂」の研究』

(二〇〇四・二、おうふう)などに詳しいが、これまでその構

成については、「十の区切りをもつ異なる文章」(碓田のぼる  
『啄木の歌 その生と死』)という見方が理解の基本線であつ  
たように思われる。一方、木股知史は、本稿冒頭の引用箇所  
について、「『今』が『永遠』の『瞳』であるというように、  
両者の交流が信じられている。そして、おそらく『今』が、  
『永遠』の豊かさに、決して行きつかないことが熟知された  
時、歌集『一握の砂』が企図される条件が整つたのである」  
(『石川啄木・一九〇九年』一九八四・一二、富岡書房)との  
大切な指摘を行っている。

なお、「一握の砂」が執筆された時期であるが、明治四十  
三年三月一日発行の「盛岡中学校校友会雑誌」第九号に掲載

された「林中書」を参考として推測した。「林中書」は「洪民日記」の記述から、明治三十九年十一月二十三日に起稿され、十二月三日に脱稿送付されたことが知られる。起稿から発行まで九十八日間であり、これを一応の目安として、第一〇号が発行された明治四十年九月二十日から逆算すると明治四十年六月中旬となる。啄木が函館に到着したのが五月五日。大火が八月二十五日であるから、「一握の砂」はその間に執筆されたと思われる。

(2) 『立身策』第二章 機会に満てる世界」二五頁

(3) 『立身策』の奥付には「編輯兼發行者」として「隅谷己三郎」と記載されているが、「官報」第三四三一号(明治二七・一二・四)附録の「廣告」の「聖書之友日課表」には「著作及版權所有者東京市隅谷己三郎」と記載されている。また、開拓社が『立身策』の翌月に発行した『鐵血宰相傳』の奥付にも隅谷己三郎とある。

明治三十年十月九日の「読売新聞」に「本日發賣」と広告された『立身策』は、翌年の十二月十四日の同紙には「四版」(明治三十三年九月十九日の「朝日新聞」の広告欄では「六版」と記されており、版を重ね広く読まれていたと推察される。また、明治三十一年三月の「少年倶楽部」(第二年第三号)の「懸賞當選の部」の「賞品目録」に『立身策』を見ることができる。

(4) オリソン・スウェット・マーデンとその影響については、E・H・キンモンス『立身出世の社会史——サムライから

サラリーマンへ』(一九九五・一、玉川大学出版部)、大澤絢子『修養』の日本近代 自分磨きの150年をたどる』(二〇二二年八月、NHK出版)に詳しい。

(5) マーガレット・コノリーは、『*The life story of Orison Sweet Marden*』の成立について「The material for this brief life story has been gathered from notes for an autobiography which he had planned to write, from memories of conversations spread over many years of association in cooperative work with him, and from correspondence with the surviving friends of his youth and early manhood」と述べている。

(6) 引用は『漱石全集 第二巻』(一九九四・一、岩波書店)によった。

国木田独歩「欺かざるの記」には、明治二十九年十月二十五日に「今日山路氏よりPushing to the Frontてふ書を借り來りて、精力集注てふ章を讀み、感ずる所多し。」と、翌日には、「午後、獨り野に出で、林を訪ひぬ。プッシング、ツ、ゼ、フロント、を携へて。」とある。

(7) E・H・キンモンス『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』(一九九五・一、玉川大学出版部)

明治三十年十月の「早稲田文学」の「新刊」は「Pushing to the Front」(三省堂版)に「Orison Sweet Mardenといふ人の小品論文を集めたるものにて尋常中學の上級などに恰好の英語學教科書なり、略ススマイルスの『セルフ、ヘルプ』に似て其の効用もまた彼れに劣らざるべき好著なり、逸

話、格言などを多く引きて面白く論じたれば、少年の志氣を奮發せしむる力あり、文章も簡明にして『セルフ、ヘルプ』よりも読み易し」と紹介している。また、明治三十四年四月十日の「読売新聞」紙上の教文館の広告欄は、「PUSHING TO THE FRONT」が『立身策』と題する書の原本」で、「諸學校に於て英語科教科書として盛んに使用せられつゝあり」としてゐる。

(8) 引用は、Boston and New York, Houghton, Mifflin and company 版 (1894) によった。

(9) 中村秀次郎『立身訓』(明三五・七、明進堂)における「一握の砂」は、啄木がここから着想を得たのではなく、a handful of が「一握の」と訳されていたことを示している。と見るべきであろう。a handful of はしばしば教科書等にも見られ、たとえば *Kanda's new series of English readers no. 4 Rev. ed (一九〇三、三峯堂) の LESSON XVII ALEXANDER THE GREAT AND THE SMALL FEATHER.* には "There is one thing alone which can make that feather lose its mysterious power, and that is, place upon it a handful of earth, and then the smallest weight will counterbalance it." とある。

(10) 「明治四十丁未歳日誌」五月二日

(11) たとえば、第六段の冒頭には「予は真理よりも寧ろ真理を求めてやまざる心を貴としとすとは、哲人スピノザが謂へる所也」となれているが、綱島梁川『病間録』(明三八・一〇、金尾文淵堂) には「眞理貴き乎、眞理を慕ふの心貴き乎、予

輩はレッシングと共に眞理其のものよりも眞理を求め、て休まざる心を取らんかな」の記述がある。また、「我等も亦、美其物よりも、寧ろ美を求めてやまざるの心を貴しとすべき也。A thing of beauty is a joy forever.」の「A thing of beauty is a joy forever.」は、キーツの『エンディミオン』の冒頭部である。美の神は妬みの神なりといへるミケルアンジエロが心こそ忍ばるれ」は、「洪民日記」の四月九日にも引かれているが、はやく明治二十六年三月の「文学界」(第三号)の「かたつむり」に「美術の神は妬みの神なりとはミカエル、アンゼロの言葉とかや」とあるほか、島崎藤村『落梅集』(明三四・八、春陽堂)に「美術の神は妬みの神たりとかや」とある。

(12) 「太陽」第八卷第五号、明三五・五) 引用は『改訂註釈樗牛全集 第四卷』(昭五五・三、日本図書センター)によった。

(13) 雑誌「成功」については、梶井輝子「日米両国の成功雑誌に関する一考察」(「アメリカ研究」第二一号、一九八七・三)、傳澤玲「明治三〇年代における立身出世論考——『成功』を中心に——」(「比較文学・文化論集」(第一一卷、一九九五・三)に詳し。

(14) 岩波茂雄「思ひ出の野尻湖」(「政界往来」十周年記念号(第一輯)、昭一四・八)。引用は、岩波茂雄『岩波茂雄「茂雄遺文抄」(一九九八・八、日本図書センター)によった。

(15) 五年 井上花筏「余の青年觀」には「現今青年は元氣消沈し、意志粗喪し、操行紊亂せり、嗚呼勇氣滿々、悠々として

迫らざる底のもの幾何ありや。今や活氣なく、品性なく、大志想なく、大抱負なく生意氣無主義腐敗墮落等有りとあらゆる忌々敷き語は上下一般青年に向つて注ぐ征矢なり、彈丸なり」とある。

(16) 「太陽」(第八卷第一号、明三五・二) 引用は『改訂註釈樗牛全集 第四卷』(昭五五・三、日本図書センター)によつた。

(17) 「太陽」(第八卷第五号、明三五・五) 引用は『改訂註釈樗牛全集 第四卷』(昭五五・三、日本図書センター)によつた。

(18) 「石川啄木の『永遠の生命』」(『日本研究 国際日本文化研究センター紀要』第二三集 二〇〇一・三)

(19) 今井泰子注釈『日本近代文学大系 第23卷 石川啄木集』(昭四四・一二、角川書店)

戸塚隆子は(18)において、

初めよりのちなかりしものの如ある砂山を見ては怖るるの一首について「逆説的に読めば、啄木は〈砂〉が『生命』ある存在である事を予期していた事になる」と述べている。